

今回は、最優秀、優秀作品が該当なしという結果に終わり、残念でした。文芸作品の評価の軸は、きわめて大雑把に言えば、アイデアと表現ということになるでしょう。アイデアの中に、題材とかテーマとか設定といった、作品の〈元〉になるさまざまな要素が含まれ、表現は、そうしたアイデアを支える文章とか構成、といった点になります。優秀賞は、やはりその両方で及第点に達していることが条件になります。奨励賞の場合はいくつかのパターンがあって、その両方においてももう一步という場合もあれば、片方は評価できるがもうひとつの点で残念（アイデアは悪くないが、表現がそれに伴っていない、ということが多い）というケースがあります。

さて、今回の奨励賞の「自傷の嘘付き」は、やはり後者のパターンと言えるでしょうか。ストーリーとしては、父親とのやりとりで家を飛び出した主人公が、見知らぬ街で古びた駄菓子屋を見つけ、そこのおばあさんとの対話の中で自分を見つめ直す、という、敢えて言えばありがちな展開です。しかしこの作品は、ストーリーで読ませるというよりは、おばあさんとの対話の中味や、その中で揺れ動く主人公の心模様のリアリティで読者に訴えかける作品だと思います。思春期特有の自意識が、作品の下敷きになる物語は多くありますが、むしろこの作品は、その自意識自体を題材にしてしまったという意味で、オリジナリティを感じました。ただ、表現がその狙いに追いついてないというか、心理描写がかなり説明的になってしまっていたり、台詞もやや過剰です。台詞と地の文の関係性というのは、音楽の主旋律と伴奏をイメージしてもらえばいいと思いますが、そのバランスが肝心です。この作者の場合、例えば劇の台本を書いてみたら、そのあたりの訓練になるのではないかと思ったりしました。それと、駄菓子屋のおばあさんのキャラクターが、作品が進むにつれて読者にもっと印象づけられるようにしてくれると（謎めいていく、ということも含め）、読者はより惹きつけられると思いました。

もうひとつの「タニシの楽しみ」は、確かに楽しませてもらいました。ただ、この作品は本来この何倍かの長さがあったいい題材だと思います。その時に果たして作者が今のおもしろさを持続させられるかどうか、挑戦してみてください。佳作の「限られた選択肢」は、これもアイデアとしてはなかなかおもしろい。そして、これは短編としてふさわしい題材だと思います。手の入れ方にはいくつかの選択肢があると思いますが、僕は、まずこの物語の「風景」が読者にもっとはっきり見えるように始めてほしいと思いました。その上で、この展開があり、最後にもう一度その風景を見せてもらって御終い、というふうに組み立ててくれれば、かなり切れのある短編作品に仕上がったように思いました。今回は、高校生の応募が少なかったことも残念で、次回それも含めて、期待します。